

印象形成過程に関する研究

—情報統合過程への多次元のアプローチ—

津 村 俊 充

問 題

印象形成過程の研究は、Asch (1964)により初めて実験的に行われた。その結果、彼は提示された性格特性の中には印象形成において中心的役割と周辺の役割をなすものがあり、中心的特性によって周辺の特性の意味が限定されたり、変容されたりしてある構造をもった印象として体制化されることを見出したのである(意味変容仮説)。

1960年代に入り、Aschの研究と類似の方法を用いて代数的モデルが提唱されたのである。それは、刺激人物(Stimulus Person, 以下S Pと略記)に対する印象はS Pを構成している個々の特性の評価的次元における評定値(評価値)の線型結合で予測されうとするものである。その2つの代表的なモデルを以下にあげてみよう。

1) Anderson (1962)の平均モデル：全体印象は個々の特性に対する評価値の単純平均として予測されうとするもの。

2) Fishbein (1963)の加算モデル：態度と信念についての研究において、当該の対象に対する態度はそれと関連する対象の評価的反応の加算として示しうとするもの。

上記に示したように、従来の多くの研究では、1)印象形成過程をある単一の尺度(ほとんどは評価的次元での「好ましい—好ましくない」の尺度)上で、幾つかの情報によって記述されたS Pの評定結果の予測をしようとするものであり、また、2)その情報として与えられる性格特性についても評価的側面にほとんど注意がはらわれて、それら特性間の相互作用は考慮に入れられていなかったのである。それらは形成された印象の予測をしようとするには考えなくてよいかもしれないが、印象形成過程を解明するためにはこの2点を考えていく必要がある。

そこで、本論文では以下の目的で2つの研究(研究Iおよび研究II)を行った。

研究Iにおける第1の目的は、人がもっている性格特性間の関連性についての信念(暗黙裡のパーソナリティ理論, implicit personality theory)を究明することである。暗黙裡のパーソナリティ理論とは、人が幾つ

かの情報から当該人物のパーソナリティ印象を形成しようとする際いろいろな推論を引き出すところの信念であり、それがその人によって明確に言語化できないことより、“implicit”として特徴づけられている。Rosenbergら(1968)は特性分類法を用いて形成された印象の構造的分析を行い、その構造をsemantic differential factorsの評価(good—bad)と力量性(hard—soft)の2つの因子で、また評価的記述においてはsocial good—badとintellectual good—badとの2つで説明している。

本研究では、Peabody (1967)の用いた特性推論による方法を用いて、Rosenbergらの結果と比較しながら特性間の関連構造を明らかにしようとするものである。

研究Iの第2の目的は、これからの印象形成過程の質的研究のために資料的な役割を果たすデータを提供することである。Anderson (1968)は555語の特性語の評価的次元における平均反応値について報告しているが、それらの特性間の関連性についての報告はなされていない。また、本邦では青木(1971)は455語の性格表現用語について分類を行っているが、その分類はあまりにも辞書的意味合いが強すぎて印象形成過程の研究には不適切であると思われる。

研究IIにおける目的は、研究Iで得られた結果からS Pを記述する特性を選択し、従来のように「好ましい—好ましくない」という単一の評価的尺度ばかりでなく他にいくつかの尺度を用いてS Pの評定をさせ、平均モデルと冗長性モデルとの比較検討を行った。この冗長性モデルは平均モデルと加算モデルとの折衷的なものでありながら、情報統合過程が情報の質的特徴に依存していることを考慮しているのである(Dustin & Baldwin, 1966, Wyer, 1968)。また、平均モデルの適合性を調べるとともに、Aschの述べる意味変容についての検討も行った。

研究 I

目的：特性推論による方法を用いて、人がもっている性格特性間の関連性についての信念を構造的に分析する。

方法：用いられた刺激特性は60語であり、以下の①

と⑥の2種類の調査を行った。

①好ましさの評定 被験者にある性格特性をもった人物(同性, 同年令)を「好き—嫌い」の7点尺度上で評定することを求めた。(被験者: 女子大学生107名)

②関連性の評定 被験者にXの特性をもった人物(同性, 同年令)はどの程度Y, もしくはYの反対であるかを7点尺度上で評定を求めた。同時に, Yの特性をもった人物はどの程度X, もしくはXの反対であるかについても行った。(被験者: 女子大学生 2778名)

結果: 60個の特性の平均評価値と60×60の特性相互の関連性の平均評定値が得られた。

i) 本研究で得られた平均評価値は大橋ら(1971)の結果よりも少し両極に近い値をとっていたが, その間の相関係数は.98であった。このことは, Anderson(1968)も述べているように各性格特性に関する評価値の平均値は安定していることを示している。

ii) また, 一般に関連性値と評価値との間にポジティブな関係が見い出された。

iii) 60×60の関連性の評定値は数量化第IV類によって分析され, 第2次解まで解釈可能であった。その2次元の特性空間は「知的望ましさ」とか「社会的望ましさ」などを含めた広い意味での「評価」の因子, および「活動性」の因子の2つで解釈された。このことは Rosenberg らの結果とは異なっている。

iv) 特性推論の方向による差異について, 一般に評価値が高い特性ほど他の特性より推論されやすく, 一方評価値の低い特性は他の特性より推論されにくい傾向があることが見い出された。

研究II

目的: 単一の評価の尺度だけでなく他のいくつかの尺度を用いて, 平均モデルと冗長性モデルとの比較検討を行うことと, 平均モデルの適合性を調べ, 意味変容があるかどうか検討することであった。

方法: 被験者は, 女子大学生46名であり, 言語的情報として与える刺激語は8個の単一特性, および8種類の2サイズセット(2特性から成るセット)が用いられた。調査は2回に分けられ, 被験者に単一の特性(第1回調査)と, 2特性(第2回調査)で記述されるSPを印象の諸次元を測定する20尺度, および評価次元の「好き—嫌い」の尺度計21尺度上で評定することを求めた(いずれも7点尺度)。

結果: i) 平均モデルと冗長性モデルの比較について 両モデルの予測値と実測値とのズレの二乗(d^2)を算出し, 両モデル間の d^2 値の平均値の検定を行った。それによると, 8セット21尺度のうち54尺度において

平均モデルの方が冗長性モデルより d^2 値が有意に小さかった。一方, 冗長性モデルの方が d^2 値が小さいのは7尺度であったが, いずれも有意でなかった。このことから, 本研究においては冗長性モデルより平均モデルの適合性がすぐれていると考えられる。

ii) 意味変容について 8セット21尺度について平均モデルの予測値の平均と, 実測値の平均の差が有意であれば, 少なくとも個々の特性になんらかの意味が発生したと考えて検討された。それによると, 全尺度168尺度のうち54尺度において有意であった。意味変容が生ずるとすれば, 個々の特性にある意味が強められる形の意味変容(加算性)が認められた尺度はその54尺度中52個であった。そして, その加算性はネガティブな特性から成るセットにおいて, また関連性の低い特性から成るセットにおいて生じやすいことが見い出された。

討 論

i) 冗長性モデルより平均モデルの適合性がすぐれている理由として次の2点が考えられた。1つは7点尺度という評定尺度法を用いることが平均モデルの適合度を高めていることである。もう一つは冗長性モデルによる予測値の求め方についてである。すなわち, そのモデル式に代入する際, 2特性の関連性を表わす主観的確率の算出が適切でなかったかもしれない。

ii) 加算性がネガティブな特性から成るセットおよび関連性の低い特性から成るセットにおいて生じやすかったことについて, これらのセットにおいては, 提示された特性だけから印象を統合することが難しくなり, 被験者はどちらか一方または両方の特性の意味を変容させて統一した印象を形成したと考えられる。

iii) 最後に, 研究IIの資料について因子分析を行い, 抽出された2次元(評価, 活動性)において平均モデルの予測との比較検討をした。それによると, 活動性に関しては平均モデルが適合し, 評価におけるネガティブな特性については平均モデルの適合度が劣ることがわかった。このことは Hamilton & Huffman(1971)の結果とは異なっていたが, 大橋ら(1975)の結果と一致していた。

以上述べたように, 従来使われてきた特性にはかなり相互に関連があり, それらの関連性がパーソナリティの印象形成に影響していることが明らかになった。今後, 印象形成過程を解明するにあたっては, 特性間の関連性をも考慮に入れながらさらに詳細に検討していく必要があるだろう。また, 印象形成過程を構造的にみていくこともこれからの課題となるであろう。